KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

1200年前後のドナウ河流域における文学事情：『クードルーン』は英雄叙事詩か

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): ドナウ河, 『クードルーン』, 英雄叙事詩, 婦人叙事詩 キーワード (En): 作成者: 松村, 國隆 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006186

関西外国語大学 研究論集 第89号（2009年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.89 (March 2009)

1200年前後のドナウ河流域における文学事情

――『クードルーン』は英雄叙事詩か――

松　村　國　隆

要　旨

これまで『クードルーン』は、つねに英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の亜流として語られてきた。たしかに復讐が戦いを惹起する点では、両作品とも変わるところがない。また、前半と後半を通じて登場する老将ヴァテの勇猛な振舞いは、この作品が英雄叙事詩と称されてきた理由のひとつにもなっている。しかしこの作品のエートスからして、両作品を同じ英雄叙事詩として扱うことはできない。つまりこの作品の最終場面では、主人公クードルーンが前面に出てきて、赦しと和解の体現者として敵を赦し、結婚によって領国間に和平をもたらそうと孤軍奮闘する。この背景には当時の読者層としての女性の抬頭があるのではないか。またそうした女性の読者層の需要でもあった、女性が筋を担って活躍するこうした作品を、「婦人叙事詩」（場合によっては「婦人物語」）として規定することができるのではないか。

キーワード： ドナウ河、『クードルーン』、英雄叙事詩、婦人叙事詩

1　はじめに

『ニーベルンゲンの歌』研究の陰に隠れていた感のある『クードルーン』研究に新しい地平を開いたのは、フーゴ・クーンとアードルフ・ベックの２人であった。[1] しかも彼らの論考は1950年代の半ば（戦中に民族精神発揚のために誤って受容された『ニーベルンゲンの歌』に言及することそれ自体まだタブー視されていた時期）の同じ年（1956年）に公にされたことは注目に値する。彼らは自らの論考を通して、『クードルーン』が数多くの反復、変種や細部にわたる諸々の矛盾を孕んでいるにもかかわらず、まぎれもなく一個の完結した詩的構想であることを明らかにするとともに、従来の「英雄叙事詩」というジャンル規定に飽き足らず、復讐心からすべてのものを破滅に至らせる『ニーベルンゲンの歌』の悲劇的な女性に、葛藤の末に到達した赦しと和解によって新たな秩序を作り出すべく積極的に行動する女性を対置させた新しい型の叙事詩である、と主張したのであった。[2]

しかしながら、いまなお多くの文学史は『クードルーン』を「英雄叙事詩」として『ニーベルンゲンの歌』に続いて補足的に解説しているにすぎない。[3] 本論文の目的は、クーンやベッ

クの論を発展させたテーオドア・ノルテの『クードルーン』論（1985年）[4] を手掛かりに、『クードルーン』が『ニーベルンゲンの歌』を十分に意識しながらも、「英雄叙事詩」とはおよそ相容れないエートスを内包した作品であることを、テクストの読み直しによって再確認することにある。

2　詩節と成立年

『クードルーン』は、基本的には所謂「ニーベルンゲン詩節」（Nibelungenstrophe）、つまり3強拍と1次強拍の「前行」（Anvers）と、①3強拍（1行目と2行目）あるいは②3強拍と1次強拍（3行目）あるいは③5強拍と1次強拍（4行目）の「後行」（Abvers）からなる「長詩行」（Langzeile）4行の詩節を踏襲しており、その形式上の類似性から、つねに『ニーベルンゲンの歌』と並べて「英雄叙事詩」として扱われてきた。しかし仔細に検討すれば、「クードルーン詩節」（Kudrunstrophe）なる用語があるように、[5]『ニーベルンゲンの歌』と『クードルーン』では微妙に異なる点もいくつか認められるが、その1つが後者では3行目および4行目の後行において強拍が増えていることである。さらに両者の分析結果および比較検討によって明らかにされたのは、この作品の前々物語（Vorvorgeschichte 1－11章）および前物語（Vorgeschichte 12－22章）において両者の韻律上の類似が顕著であるのに対し、主要物語（Hauptgeschichte 23－34章）ではむしろその変種が中心を占めている点である。[6]

ところでこの「ニーベルンゲン詩節」およびその変種は、主としてドナウ河流域の歌人たちの歌にも見られる形式である。当時の恋愛歌謡の詞華集『ミンネザングの春』（Des Minnesangs Frühling）に収められたキューレンベルクの騎士（Der von Kürenberg）やブルクグラーフ・フォン・レーゲンスブルク（Der Burggraf von Regensburg）やディエトマル・フォン・アイスト（Dietmar von Eist）等はこの形式の歌を数多く遺している。ディエトマルの歌の中にはすでに南仏から受容したカンツォーネ形式も採用されているが、総じてドナウ河流域の歌謡には、独自の系譜が認められる。ハイデルベルク大学の中世文学史家フリッツ・ペーター・クナップはこのドナウ河流域の歌謡の系譜を「ヨーロッパ精神史のもっとも驚くべき、もっとも理解しがたい（文学）現象」[8] の1つであると述べているが、けっして誇張した表現ではない。

従来の研究では、『クードルーン』の成立年については『ニーベルンゲンの歌』の成立から遅れること数十年、シュタイアーマルクで創作されたのではないかと推定されてきた。しかし最近の研究では、作者が商人の生活や都市の生活に通じていることから、この作品はバイエルンからオーストリアにかけてのドナウ河畔の諸都市、レーゲンスブルク、パッサウ、あるいはウィーンで誕生したのではないかと推定されている。[9] ドナウ河文化圏では『ニーベルンゲン

の歌』や初期ミンネザングの歌謡の伝統が脈々と流れており、[10]『クードルーン』もまたその流れの中に位置づけることができるかも知れない。しかし『ニーベルンゲンの歌』と同様に、この作品もその成立年および成立場所に関しては推測の域を出ない。ただしはっきり言えることは、インスブルックの宮廷において時の皇帝マクシミリアン1世(Maximillian I, 1459－1519)の命を受けて、南チロルのボーツェン在住の税官吏ハンス・リート（HansRied, ?－1516）が1504年から1515年にかけて集成した、いわゆる『アンブラス英雄本』(Ambraser Heldenbuch. Codex Vindobonensis, Series nova 2663）に、12番目のテクストとしてこの『クードルーン』（Ditz puech ist von Chautrün）が収められているということだけである。[11] この初期新高ドイツ語で記された作品を平準な中高ドイツ語に書き改めたものが、じつは今日われわれの手にしているテクストである。最近の研究成果によれば、この作品はまた14世紀にヘブライ語で書かれた版でも流布しており、しかもこの版はカイロで発見されたという。[12] こうした複雑な成立事情を考えると、『ニーベルンゲンの歌』と同じ歌謡の伝統のなかで作られたと言っても、「ニーベルンゲン詩節」に似た「クードルーン詩節」を用いているという形式上の類似性から、直ちに『クードルーン』を英雄叙事詩として規定する根拠にならない。

3　登場人物

次に『クードルーン』の登場人物について見ておこう。クーンはこの叙事詩の作者が登場人物の点でも『ニーベルンゲンの歌』を強烈に意識して創作していることに言及し、これを「マニリスムス」(ないしは「マニエリスムス」)（Manierismus）の手法と呼んでいる。[13]「マニリスムス」とは美術においてしばしば用いられる術語であるが、とにかくエピゴーネンの時代あるいは遅れて来た世代が好んだ芸術手法で、オリジナルのものをもとにしながら、それとは似て非なるものを生み出すのがその特徴である。ここではとくに、両作品において中心的な役割を演じている二人の女性クリエムヒルト（Kriemhild）とクードルーン（Kûdrûn）に光を当てて、その性格および行動を比較・検討したい。

まず、『ニーベルンゲンの歌』の中心人物であるクリエムヒルトから始めたい。彼女は最初のうち「愛らしい」(liebenswert)、「異性に対してつれない」(spröde）少女として登場しているが、そうした性格は作品冒頭で彼女が見る「鷹の夢」(Falkentraum）のくだりに如実に表れている。

13 In disen hôhen eren trôumte Kriemhilde,
wie si züge einen valken, starc schœn' und wilde,
den ir zwêne arn erkrummen. daz si daz muoste sehen:
ir enkunde in dirre werlde leider nimmer geschehen.

14 Den troum si do sagete ir muoter Uoten.
sine kundes niht bescheiden daz der guoten:
"der valke den du ziuhest, daz ist ein edel man.
in welle got behüeten, du muost in schiere vloren hân."

15 "Waz saget ir mir von manne, vil liebiu muoter mîn?
âne recken minne sô wil ich immer sîn.
sus schoen' ich wil belîben unz an minem tôt,
daz ich von mannes minne sol gewinnen nimmer nôt." [14)]

この栄華の中にあってクリエムヒルトは夢を見た。
夢のなかで彼女は強くて美しい野生の鷹を飼っていた。
その鷹を二羽の鷲が引き裂いたのだ。
彼女にとってこんなに悲しいことはこの世で起こったことがなかった。

彼女はこのことを母ウオテに話した。
母親は娘に次のことを説いて聞かせなければならなかった。
「あなたの飼っているその鷹は、気高い殿方です。
神さまが守ってくださるのでなければ、あなたはその殿方を失ってしまいます。」

「どうしてわたしに殿方のことをおっしゃるのです、愛するお母さま。
わたしがこれから暮らしてゆくのに、勇者などいりません。
わたしは死ぬまでこうしていつまでも美しい姿でいたいのです。
殿方の愛のためにけっして苦しみを受けたくはありません。」

その後、彼女は成長して恋する乙女となり、憎からず思っていた英雄ジーフリトに求婚されて彼の妻となる。しかし第一部の終り近くで夫がトロネゲのハゲネによって謀殺されると、その苦痛は耐え難いものとなる。クリエムヒルトの苦痛はやがて激情として視覚化され、彼女はこ

の激情をもって執拗にハゲネを責めたてる。第二部では、彼女は情け容赦のない復讐の女に変身してゆく。やがて彼女は宮廷的秩序を破壊し、ブルゴント国のみならずエッツェル国までも破滅に導く。彼女が作中で二度も「鬼女」（vâlandinne）呼ばわりされるのも無理からぬことであろう。[15)]

1748 Des antwurte ir mit zorne　der fürste Dietrîch
“ich binz der hât gewarnet　die edeln künege rîch,
und Hagenen den küenen,　den Burgonden man.
nu zuo vâlandinne,　du solt mihs niht geniezen lân.”[16)]

それを聞いて、身分高いディエトリーヒが憤然として言った。
「気高く勢威ある王たちや勇敢なハゲネ、その他
ブルゴントの郎党に警告を与えたのはこのわしじゃ。
さあ、鬼女よ、わしを生かしておかれぬがよかろう。」

2371 Nu ist von Burgonden　der edel künec tôt.
Gîselher der junge,　und ouch her Gêrnôt.
den schatz den weiz nu niemen　wan got und mîn:
der sol dich, vâlandinne,　immer wol verholn sîn.”[17)]

いまはブルゴントの気高い国王をはじめ、
若武者ギーゼルヘルにゲールノート殿もお果てなされた。
宝のありかを知る者は、神とわし以外に誰もおらぬ。
鬼女よ、そなたには宝は永遠に隠されたままにしておこう。」

ところが、『クードルーン』では、『ニーベルンゲンの歌』における王妃クリエムヒルトとは異なり、女主人公クードルーンが「鬼女」呼ばわりされることはない。かろうじて、オルマニーエ（Ormanîe）側の王ルデヴィーク（Ludewîc）の妻であり、ハルトムオト（Hartmuot）の母であるゲールリント（Gêrlint）がただひとり、息子への偏愛から、十数年にわたりクードルーンに対して辛く当たるという悪役を演じつづけ、「鬼女」の汚名を一手に引き受けることになる。

629 Dô er *kom heim* ze lande　dâ er hête verlân
vater unde muoter,　rihten sich began
ze starkem urliuge　Hartmuot der vil grimme.
daz riet im ze allen zîten　Gêrlint diu alte vâlentinne.[18)]

父母を残してきた故国に
戻ったとき、怒れるハルトムオトは
大きな戦いの準備をした。
いつもこのようなことを彼に助言したのは老いた鬼女ゲールリントであった。

では、クードルーン自身はどうであろうか。この作品では、ウオテⅠ― ウオテⅡ― ヒルデⅠ― ヒルデⅡ― クードルーンという女性の系譜で物語が展開している。その中心物語でクードルーンの母ヒルデ（ヒルデⅡ）は夫ヘテルをオルマニーエ王ルデヴィークに討たれたうえ、娘クードルーンをルデヴィークとその息子ハルトムオトによって略奪される。しかしクードルーンはゼーラント王ヘルヴィークとすでに婚約しており、一年後には結婚することになっていた。ヒルデは老将ヴァテ等の軍勢をオルマニーエに派遣し、娘の奪還を図る。クードルーンは敵国で苦難に耐え、ハルトムオトの要求を拒絶し続ける。彼女の脳裏にもクリエムヒルトと同じ思いが去来していたであろうことは容易に想像されるし、「花嫁略奪」がヘゲリンゲンの人々の復讐心を燃え立たせたのも当然の帰結であった。果たしてオルマニーエ王ルデヴィークと王妃ゲールリントの死によって両陣営は『ニーベルンゲンの歌』のように破滅に向かうかに見えるが、ここでクードルーンは女性としてヴァテを初めとする男性たちと渡り合い、積極的に和解・結婚・和平の樹立に向かう。作品の最終段階に至って、クードルーンの役割はクリエムヒルトのそれと真逆の性格のものであることが明らかになる。その極めつけの場面は、クードルーンが母ヒルデや老将ヴァテの反対を押し切って、虜囚の身である敵国の王子ハルトムオトを赦すだけでなく、彼女がオルマニーエで苦難をともにしたヒルデガルトと婚約させようとするくだりである。この点において『クードルーン』は、『ニーベルンゲンの歌』と決定的に異なる世界を確立することになる。[19)]

4　「花嫁略奪」（Brautraub）と「復讐」（Rache）

ところで『クードルーン』における「花嫁略奪」から「和解・結婚・和平」への過程は具体的にどうであったのか。「花嫁略奪」の問題の再検討を試みたテーオドア・ノルテは、このモチーフを自らの論の中心に据えてその歴史的経緯を詳細に論じている。もともと「花嫁略奪」

のモチーフは北欧神話をはじめ多くの説話にみられ、ゲルマンの部族法が現実社会において効力を発揮していた5世紀から9世紀にかけて、「花嫁略奪」とその後の「略奪結婚」はむしろ自明のことであった。したがって、これにより成立した婚姻は有効であると看做されていた。しかし「花嫁略奪」や「略奪結婚」が法に基づいて選ばれ、法を遵守する支配者たちからはもはや歓迎されず、部族法によっては婦人の略奪が処罰に値するものとして規定されるものさえあった。[20]たとえば、古代ゲルマン神話学者ゲオルク・ベゼッケが紹介している「スニオ伝説」は、次のような内容のものである。

> 国王スニオはゴート族の王の娘を愛している。彼女も同様に彼を愛している。しかし彼の使者たちはゴート族によって殺害される。スニオは軍隊とともに敵国を急襲し、ゴート王は領土を失う。ところが彼の娘はその間にスウェーデン王と結婚してしまう。スニオは知略に富んだ使者を通じて事情を恋人に知らせ、彼女を誘拐して妻とする。[21]

ベゼッケはこのモチーフとの類似性を根拠にして、スニオ伝説が『クードルーン』物語の手本になったのではないかと推定しているが、いずれにしても、ゲルマン部族法の時代に実際に行われていた「花嫁略奪」や「略奪結婚」を『クードルーン』の作者が巧みに採り入れたことは大いに考えられる。ただし7世紀以降の民族法では、たとえ「略奪結婚」であっても、略奪された女性の同意が重視されるようになったし、若い男女がそれぞれの部族によって引き裂かれながら相思相愛の関係にあることが中心テーマになっているスニオ伝説のような作品もまま見られる。中世のテクストを読む際に、われわれはこうした点にも留意しなければならない。とくに『クードルーン』の場合、事情はいっそう複雑である。なぜなら形式的には「ニーベルンゲン詩節」を踏襲しながら、また素材としてもこのような民族法の時代のものを援用しながら、作品自体のエートスは、後に触れるように、明らかに後の時代に由来するのだから。

ところで、本来ならこのような「花嫁略奪」あるいは「略奪結婚」に言及する前に、中世の貴族社会における婦人の社会的地位について明確にしておかなければならない。この当時、女性は子孫を後世に遺すという再生産的な機能ゆえに、子供を持たない結婚は得てしてさまざまな問題を引き起こした。また、両親にとって娘よりも息子のほうが幾層倍も待望されたが、それは息子のほうが両親の財産を相続することができるという、ただそれだけの事情による。これに対して娘が遺産を相続することができたのは例外的で、両親に息子がいない場合に限られていた。さらに法廷では女性は後見人（夫）を立てる必要があり、法的には一個の人格として認められていなかった。11世紀から12世紀にかけて、教会がその影響力を発揮したこともあって、12世紀以来、婚姻の際に男女の合意、とくに若い女性の同意が不可欠の条件として挙げられるようになった。確かに形式的には男女の合意が結婚の前提として次第に浸透するようにな

ったとはいえ、中世の貴族社会の婚姻においてこの前提は必ずしも十分に遵守されていたわけではない。[22)]

『クードルーン』の場合、このモチーフは筋の展開にとってきわめて重要であり、かつ不可欠のものであった。クードルーンの母親でアイルランド王ハゲネと王妃ヒルデ（Ⅰ）との間に生れた娘ヒルデ（Ⅱ）が、すでにヘゲリンゲンの王ヘテルに求愛されたことから始めるのがいいだろう。厳密に言えば、この場合は「花嫁略奪」ではなく、両人の合意のもとで結婚に至っている。ところがそこに娘の父ハゲネが武力をもって急襲し、父の軍勢と夫の軍勢との間で戦闘が始まる。娘であり妻であるヒルデ（Ⅱ）は大いに困惑せざるを得ない。中世における婚姻にはこうした厄介な困難がつねに付いて回り、婚姻それ自体が戦闘の口実、火種になりかねなかった。こうした問題はひとえに、男系の世襲相続制度のもとで女性が置かれていた地位の低さに由来するものであった。[23)]

ヒルデ（Ⅱ）の娘クードルーンに対してオルマニーエ王ルデヴィークと王妃ゲールリントの息子ハルトムオトによって武力をもってなされたのは、まさにこの「花嫁略奪」に他ならなかった。彼らが最初に敢行したのは求婚の旅であったが、それが拒絶されるやいなや、このような強硬手段に打って出る。そしてこの「花嫁略奪」が結果として復讐の戦いを引き起こす。王と彼の側近たちを中心にした戦闘の場面は、形式面のみならず内容面でも、確かに『ニーベルンゲンの歌』のそれに近似しているかに見える。ではその内実は果してそうなのだろうか。

5　「赦し」（Versöhnung）と「和解」（Friede）

『クードルーン』において前面に出て活躍し、「復讐」の原理を体現しているは老将ヴァテである。この老将は、ヘゲリンゲン側の英雄として、古代ゲルマンの英雄像を髣髴させる。『クードルーン』が英雄叙事詩と称される所以は、彼の相貌と立ち居振舞いおよび徹底した「復讐」に与るところが少なくない。しかし叙事詩の半ば以降、とくに第24章以降、老将ヴァテに代わってクードルーンの存在が俄かにクローズアップされてくる。[24)] ここで再度確認しておきたいのは、彼を筆頭に男性たちがなおキリスト教以前のゲルマンの古い「復讐」の原理に基づいて行動しているのに対して、作者はクードルーンを徹底して「和解（和平）」のために生きる女性として登場させ、男性たちに対置させている点である。もちろん14年間という永い捕虜生活が恨みや憎しみを生まないはずはないし、彼女の胸に去来したものもそのような複雑な思いであったに相違ない。にもかかわらず、彼女は苦労をともにし、援助を惜しまなかった敵王の娘オルトルーンを救済しようとするのである。

1525 Dô sprach weinende daz Hetelen kint:
“nu lât mîn geniezen die durch fride sint
her ze mir gegangen und bî mir gestanden,
daz ist Ortrûn diu edele und ir gesinde von Ormanîelande.”[25)]

ヘテルの娘クードルーンは涙を流しながら言った、
「わたしに赦しを乞い、庇護を求めて、わたしの傍らにいる
この城の人たちを、わたしに免じて、どうかお見逃し下さい。
それはオルマニーエ国の王女オルトルーンとその侍女たちです。」

もちろん、クードルーンはけっして博愛の使徒ではなかった。彼女の侍女でありながら、オルトルーンとは異なり、苦難を彼女と分かち合うどころか、敵側の王の酌人と恋仲になったヘレガルト、そしてそのあとを追ってゲールリントがヴァテの刃を逃れて嘆願に来たときに、クードルーンはこれを断固撥ねつける発言に終始する。それでもなお、彼女はこれら2人の女性を匿おうとする。

1514 Vil schiere kom Hergart, diu junge herzogîn:
“Kûdrûn vil edele, du solt genædic sîn
mir vil armen wîbe. gedenke, daz wir hiezen
und bin noch dîn gesinde; des lâz mich, <*edele*> frouwe, geniezen.”

1515 In zorne sprach frou Kûdrûn: “ir sult ûf hôher stân.
allez daz uns armen leides wart getân,
daz klagetet ir vil kleine und ahte ez iuch ringe.
nu ist ouch mir unmære, ob iu übele oder wol gelinge.”

1516 Dô kom ouch dar gegâhet diu übele Gêrlint.
diu bôt sich für eigen für daz Hilden kint:
“nu ner uns, küniginne, vor Waten und sînen mannen.
ez*n* ste an dir alleine, ich wæne ez si umbe mich ergangen.”

1517 Do sprach diu Hilden tohter: ‘‘nu hœre ich iuch gern,
daz ich iu si genædic. wie möhte ich iuch gewern?
ich bat iuch nie *zer* welde des <*ir mir*> woltet volgen.
ir wârt mir ungenædic; des müeste ich iu von herzen sîn erbolgen.’’

* * *

1518 ‘‘Iedoch <*stêt*> mir dar nâher under diu magedîn.’’[26)]

そのとき若い公女ヘレガルトは進み出て言った、
「気高いクードルーンさま、どうかこの哀れなわたしに
恵みをお与えください。わたしはかつてあなたの侍女でしたが、
今でもそのつもりでおります。」

クードルーンは怒って言った、「お下がりなさい。
わたしたちがどんなに苦しんでいても、
あなたは少しも嘆かず、知らぬ顔をしていたではありませんか。
あなたの身がどうなろうと知ったことではありません。」

そこへ意地の悪い王妃ゲールリントも駆け込み
ヒルデの娘の前に恭しく跪いて嘆願した。
「王女さま、どうかわたしたちをヴァテからお守りください。
わたしの命を助けることができるのはあなたおひとりです。」

ヒルデの娘は言った、「わたしに助けてほしいとのことですが、
どうしてわたしがあなたを守る必要がありましょう。
わたしの願いがあなたに聞き入れられたことは一度もありませんでした。
あなたがわたしに無慈悲だったことを、恨みに思っています。」

「でもわたしの近くに来て、侍女たちのなかに紛れ込みなさい。」

いったんクードルーンに匿われたゲールリントとヘレガルトではあったが、ヴァテに見つけ出され、彼女たちの嘆願もむなしく、いずれも彼によって首を刎ねられる（1523，1528）。では、

クードルーンの「匿う」という行為は無駄であったのだろうか。ここではむしろ、クードルーンが彼女たちの罪を明らかにしながらも、「匿う」という救命の行動に出たことの意味を深く受けとめるべきであろう。われわれが看過してはならないのは、『ニーベルンゲンの歌』には見られなかった新しいエートスを作者がこの作品に忍び込ませている点である。クードルーンの和解への意志はじつに徹底しており、それは彼女の母ヒルデにまで及ぶ。

1595 Ir tohter und Ortrûn giengen dâ saz.
si sprach: ‘‘vil liebiu muoter, gedenket an daz,
daz niemen mit übele sol deheines hazzes lônen.
ir sult iuwer tugende an *dem künige Hartmuoten* schônen.’’[27)]

ヒルデの娘クードルーンとオルトルーンはヒルデの座席へ歩み寄った。
彼女（クードルーン）は言った「お母さま、どんな恨みに対しても、
敵意をもって報復してはならない、そうお思いになりませんか。
お母さまのお情けで、どうかハルトムオト王の命をお助け下さい。」

これは感動的であると同時に奇妙な場面でもある。母ヒルデは夫ヘテルをオルマニーエ王ルデウィークによって奪われているのであるから、敵王の息子を赦すことなどもっての外の行為である。また、クードルーンにしても、彼女を略奪し母ゲールリントとともに結婚を執拗に迫った張本人ハルトムオトを赦すに際して、複雑な思いが去来したであろうことは想像に難くない。それでも復讐の連鎖を断ち切ろうとする彼女の意志は固く、母ヒルデを説得する役回りをも自らに引き受けている。ヴァテのみならず母ヒルデも主張しているように、花嫁略奪の張本人であるハルトムオトは赦されざる人物であるのだから、復讐の連鎖は彼に及んで当然であろう。それにもかかわらず『クードルーン』の作者は、この場面でも女主人公を通してヴァテやヒルデの原理とは対極にある「和解（和平）」の原理を展開している。ここに所謂「和解（和平）」とは、ただ戦闘がない状態といった消極的なものではなく、敵味方の双方が互いに根気強くわたり合い、「復讐」の連鎖を断ち切り、共生への道を探ろうとする態度のことである。

だが、これだけでは終わらない。彼女の関心はさらに、ヘゲリンゲンとオルマニーエ両国の和平のために尽力し、結婚という公的にして神聖な儀式を通じてこれを実現することにも及ぶ。このとき彼女はハルトムオトに、ポルトガル王女にしてクードルーンの侍女であったヒルデブルクを薦める。この縁組の提案は、彼女の父ヘテル王がハルトムオトに身分の違いからクードルーンとの結婚を拒絶した経緯を考慮してなされたものであることを看過してはならない。

1602 Dô sâhen in die frouwen güetlichen an;
dâ von er heimlíche *bezzer sít* gewan.
mit vollen wart versüenet der haz, den si dâ truogen,
daz si des gar vergâzen, daz ir recken ê einander sluogen.[28)]

娘たちがハルトムオトを見る目には、好意がこもっていた。
のちにこの王はさらに親しみをもって迎えられる。
人々が抱いていた敵意はすっかり消え去り、
勇士たちは敵意をもって戦うことすらすっかり忘れるほどであった。

それにしても、これまでの「花嫁略奪」とその帰結としての戦闘が、なぜかくのごとく「赦し」と「和解」へと急転換したのだろうか。ここで論者は牽強付会の謗りを覚悟の上で、当時の聞き手ないしは読者層について言及しておきたい。この時代には作者が女性であることは、実際にエロイーズやビンゲンのヒルデガルトのような例外的な人物はいるにはいたが、それらは極めて稀な現象であり、書き手は聖職者や下級貴族（騎士）や遍歴歌人等に限られていた。しかしながら文字が読める層となると話は別であり、その点では男性ではなく女性の方が圧倒的なパーセンテージを占めていた。それゆえに、作者が読者としての女性を想定して作品を提供したと理解するのは、あながち不自然であるとは言えないだろう。むしろそれには十分な根拠が認められる。歴史学者のヨアヒム・ブムケは浩瀚な名著『中世騎士文化』（München 1986）のなかで当時の読書事情に言及し、次のように述べている。すなわち「貴族の娘が読み書きを習うのはけっして異例なことではなく、少なからぬ女性がラテン語の知識を習得し、ラテン語の詩篇を読む能力を身に着けていた」[29)] と。また彼は『ザクセンシュピーゲル』の中で婦人が相続するものとして「詩篇、礼拝の際に用いられるすべての書物、婦人が通常読むものとされているすべての書物」（Sachsenspiegel. Landrecht. Ⅰ, 24, 3）が挙げられていることにも注目している。[30)] これを要するに、「忍耐」から「赦し」と「和解」へのクードルーンの変身は、当時の女性読者が求めた願望の具現であり、その意味で『クードルーン』は新しい時代の作品であったと言えるのではないか。さらには、女性読者の問題とも関連するが、ヴェルナー・ホフマンがこの急転換を可能ならしめた背景にキリスト教精神を読み取っていることも指摘しておかなければならないだろう。[31)] 他方、「オーストリア文学史」の再検討のなかで中世を担当したクナップはきわめて慎重に、クードルーンの行動にキリスト教精神が介在していたのかどうかという問題を提起している。[32)] しかしこのことはそれ自体ですでに大きなテーマであり、さらなる検証を必要とするであろう。いずれ稿を改めて論じたい。

6　おわりに

以上のことから、ブルンナーの顰に倣って、論者は『クードルーン』を独特の性格をもった「婦人（ないしは女性）叙事詩」（Frauenepos）と呼びたい。[33] あるいは、ノルテが提唱しているように、「婦人（ないしは女性）物語」（Frauenroman）と呼んでもいいのではないか。[34] 確かに作品の舞台や用いられている詩節形式、さらにはヴァテに代表される英雄たちが引き起こす戦闘場面を重視すれば、従来のように「英雄叙事詩」（Heldenepos）という呼称に拘泥することになるかもしれない。しかしながら、作品が佳境に入るにつれ女主人公クードルーンがますます中心的な役割を演じるようになり、復讐という行為そのものを完全に否定してはいないものの、復讐が敵陣営の根絶にまで展開するところでは、赦しと和解のために尽力するようになる。[35] その意味からすれば、この作品のエートスは『ニーベルンゲンの歌』のそれとはおよそ似て非なるものであり、むしろ「宮廷叙事詩」のそれに限りなく近いと言ってよいのではなかろうか。

付記　本論は、2008年７月６日（日）に大阪産業大学で開催された阪神ドイツ文学会のシンポジウム「『クードルーン』を読む」（第197回研究発表会）で報告した内容をもとに、論文としてまとめたものである。

注

1）Hugo Kuhn: Kudrun. In: Münchener Universitäts-Woche an der Sorbonne zu Paris, hg. von J. Sarraiih und A. Marchionini. München 1956, S. 135－143 Später in: Kleine Schriften. Bd. 2 [Text und Theorie]. Stuttgart [Metzler] 1969, S. 206－215. Ferner in: Nibelungenlied und Kudrun, hg. von Heinz Rupp. Darmstadt 1976 [Wege der Forschung 54], S. 502－514; Adolf Beck: Die Rache als Motiv und Problem in der 'Kudrun'. Interpretation und sagengeschichtlicher Ausblick. GRM 37 (1956), S. 305－338; Roswitha Wisniewski: Kudrun. Stuttgart [Sammlung Metzler 32] ²1969.

2）Vgl. Kuhn, a.a.O., S. 210.

3）Werner Hoffmann: Kudrun. Ein Beitrag zur Deutung der nachnibelungischen Heldendichtung. Stuttgart [Metzler] 1967; Bruno Boesch: Zur Frage der literarischen Schichten in der Kudrundichtung. In: Festschrift für Siegfried Gutenbrunner zum 65. Geburtstag. Heidelberg [Carl Winter] 1972, S. 15－31; Werner Hoffmann: Die 'Kudrun'. Eine Antwort auf das Nibelungenlied. In: Nibelungenlied und Kudrun, hg. von Heinz Rupp. Darmstadt 1976 [Wege der Forschung 54], S. 599－620.

4）Theodor Nolte: Das Kudrunepos — ein Frauenroman? Tübingen [Max Niemeyer] 1985, 76 S.

5）Vgl. Joachim Heinzle: Heldendichtung. In: Reallexikon. Bd. 2. Berlin/New York [Walter de Gruyter] 2007, S. 21－25; Ursula Schulze: Epenstrophe. In: Reallexikon. Bd. 1. Berlin/New York [Walter de Gruyter] 2007, S. 453－455.

6）このテーマについては、上記シンポジウムにおいて、武市修氏（関西大学）が「『クードルーン』における韻律について」と題して報告されており、作品の形式と内容の呼応関係その他、大いに参照させていただいた。

7）Karl Lachmann, Moriz Haupt, Friedrich Vogt und Carl von Kraus (Hgg.), Des Minnesangs Frühling. Bearbeitet vo Hugo Moser und Helmut Tervooren. Stuttgart [Hirzel] [38]1988, S. 25; S. 32; S. 57:

① Der von Kürenberg (L 8,25)

'Ez hât mir an dem herzen　vil dicke wê getân,

daz mich des geluste,　des ich niht mohte hân

　noch niemer mac gewinnen.　daz ist schedelîch.

　jône mein ich golt noch silber:　ez ist den liuten gelîch. '[8]

わたしの心はじつにしばしば辛酸をなめてきた、

得られなかったもの、けっして得られないものを

　激しく求めたために。それは心に痛手を与えるものだ。

　わたしの言っているは金でも銀でもない。それは人の姿をしている。

② Der Burggraf von Regensburg (L 16,15)

Ich lac den winter eine.　wol trôste mich ein wîp,

vore si mir mit vröiden [ ] kunde　die bluomen und die sumerzît.

　daz nîden merkære.　dest mîn herze wunt.

　ez enheile mir ein vrowe mit ir minne,　ez enwirt niemêr gesunt. [9]

わたしは冬中ずっと独り寝していた。ある女性がわたしに希望を与えてくれた、

まずわたしに歓んで花と夏を知らせてくれたのだ。

　それを見張り人たちが妬んでいる。そのためわたしの心は傷ついている。

　婦人が愛の力でわたしを癒してくれなければ、心の傷は決して癒えない。

③ Dietmar von Eist (L 33,15)

Ahî, nu kumt uns diu zît,　der kleinen vogellîne sanc.

ez grüenet wol diu linde breit,　zergangen ist der winter lanc.

　nu siht man bluomen wol getân,　an der heide üebent si ir schîn.

　des wirt vil manic herze vrô,　des selben trœstet sich daz mîn. [10]

ああ、この季節が、小鳥たちの歌声がわたしたちのもとにやって来た。

大きな菩提樹が緑に茂っている。長い冬は過ぎ去った。

　美しい花々が咲き、野原ではその姿を競っている。

　それを見て多くの人の心が歓び、わたしの心もそれで慰められている。

8）Fritz Peter Knapp: Die Literatur des Früh- und Hochmittelalters. In: Geschichte der Literatur in Österreich von Anfängen bis zur Gegenwart, hg. von Herbert Zeman. Bd. 1, Graz [Akademische Druck- u. Verlagsanstalt] 1994, S. 247.

9）Vgl. Karl Stackmann, Kudrun. In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. Bd. 5. Berlin/New York [Walter de Gruyter] 1985, Sp.412.

10）拙論「1200年前後のドナウ河流域における文学事情――パッサウ司教区を中心に――」、「関西外国語大学研究論集」第87号101頁参照。

11）Vgl. Stackmann, a.a.O., S. 410.

12）Vgl. Heinz Dopsch, Karl Brunner und Maximilian Weltin (Hgg.): Österreichische Geschichte 1122－1278. Die Länder und das Reich. Wien [Ueberreuter] 1999, S. 94.

13）Kuhn, a.a.O., S. 136.

14）Das Nibelungenlied. Nach der Ausgabe von Karl Bartsch, hg. von Helmut de Boor. Deutsche Klassiker des Mittelalters. Wiesbaden (Brockhaus) [9]1967, S. 4.

15）この語はラテン語の malus genius（「悪霊」）や diabolus（「悪魔」）に相応する語で、もともと古代ノルド語 fala（「悪魔」）に由来する動詞の現在分詞形 valand, voland, valend から生まれた語の女性形だと言われている。この語は、ゲーテの『ファウスト』にも見られる（Platz! Junker Voland kommt 4023）。

16）Das Nibelungenlied, a.a.O., S. 276.

17）Das Nibelungenlied, a.a.O., S. 370.

18）Kudrun. Hrsg.von Karl Bartsch, überarbeitet und neu eingeleitet von Karl Stackmann. Deutsche Klassiker des Mittelalters. Wiesbaden (Brockhaus) [5]1965, S. 128.

19）Vgl. Nolte, a.a.O., S. 61－68.

20）Vgl. Nolte, a.a.O., S. 15.

21）Vgl. Ebenda und Georg Baesecke: Der Münchener Oswald. Text und Abhandlung. In: Germanistische Abhandlungen. Bd. 28. Breslau (M. & H. Marcus) 1907, S. 286f.

22）Vgl. Nolte, a.a.O., S. 27.

23）Vgl. Nolte, a.a.O., S. 26.

24）Vgl. Kudrun, a.a.O., S. 235ff.

25）Kudrun, a.a.O., S. 302.

26）Kudrun, a.a.O., S. 301f.

27）Kudrun, a,a,O., S. 315.

28）Kudrun, a.a.O., S. 317.

29）Joachim Bumke, Höfische Kultur. München [Deutscher Taschenbuch Verlag] 1986, S. 474.

30）Vgl. ebenda.

31）Vgl. Hoffmann, a.a.O., S. 197ff.

32) Vgl. Knapp, a.a.O., S. 319.

33) Vgl. Brunner, a.a.O., S.94.

34) Vgl. Nolte, a.a.O,, S. 69ff.

35) Vgl. Knapp, a.a.O., S. 319f.

（まつむら・くにたか　国際言語学部教授）